

名古屋校舎の古き情報族としての願い

浅野 俊夫(文学部)

情報メディアセンターの年表をみると、1988年度末まで電子計算機センター(高橋正所長(経済学部教授))が豊橋の記念館にIBM4331というホストコンピュータを置き、豊橋校舎および旧名古屋校舎(車道)の端末室を使って教育研究へのサービスおよび事務の給与計算などへのサービスを行っていたが、1989年から両校舎に情報処理センターを置き、豊橋は藤田佳久文学部教授、名古屋は坂東昌子教養部教授を所長として研究教育へのサービスを始めたように読み取れる。しかし、第一期教育研究情報システムが稼働したのは1988年4月でホストコンピュータは日立のHITAC M640/20とも記されている。では、新名古屋校舎初年度の情報教育はどのような状態だったのであろうか。

実は、新名古屋校舎が開校した1988年4月当初から、現在の国際中国学研究センターと研修室の部分が名古屋情報処理センターであり、事務室の奥には完全空調された立派なホストコンピュータ室が用意されていた。形式的には1988年中は豊橋に事務長(課長)がいて電子計算機センターと名乗っていたのかもしれないが、実質的には新校舎にホストコンピュータが置かれ、文部省(当時)の学術情報ネットワーク(N1)で国立大学の大型計算センターや図書館情報システムと接続を開始していた。給与計算などの事務システムは分離され豊橋に残された。豊橋と名古屋には東海地区では初めてNECのパソコンPC9801を50台備えたパソコン実習室が作られ、学生や教員から切望されていた日本語ワープロソフトの一太郎や表計算ソフトのLOTUS123が利用可能であり、大型汎用機では当時は先進的であったSASによる統計学の授業も開始されていた。

小生が名古屋センターの責任者を務めたのは1990年10月から1992年9月の短い期間であったが、名古屋校舎の開設要員として1987年に愛知大学教養部に赴任して以来、情報処理センターの創設、全学情報連絡会議を立上げて全学LANを敷設したこと、教養部の二部幹事の時、教養部の科学実験室を提供して車道にパソコン実習室を実現させたこと、評議会施設委員の時、情報メディアセンターと図書館との融合を目指して、メディアゾーンの実現に奔走したことなど、2005年に文学部に移るまでの18年間の奮闘が走馬灯のように思い出される。前任地では19年間、大学院生だけが相手の研究生生活だったので、愛知大学の新キャンパスの創設と新しい教養教育の模索ができること

に惹かれて愛知大学に赴任した。最初の一年間は豊橋と車道で心理学を教えながら情報教育の重要性を実感し、新校舎での準備に喧々諤々の議論をし、三好では情報教育体制の充実に全力投球した。

三好キャンパスの開設要員として赴任した身からすれば、それを棄てるのは身を切られる思いであるが、ささしまで新しい時代の情報教育が模索され、更なる進化を遂げることを期待している。この特集をしている機関誌の「COM」という名称は筆者の発案であるが、computer, communication, communityの接頭辞で「共に」という意味がある。名古屋情報メディアセンターの伝統は皆でよく話し合いながら絶えず新技術に挑戦するという進取の精神である。5学部が協同すれば新しい花が開くはずである。